

中国側報道2.

歴史を胸に刻み、日中不再戦、世代をつなぐ友好を

2015年9月18日 黒龍江日報 文・撮影 張長紅

緑川英子の遺児、日中友好協会大阪府連合会訪問団とともに佳木斯烈士陵园を慰霊し、一行は「歴史を胸に刻み、日中不再戦、世代をつなぐ友好を」という志を表明した。



9月13日、前夜の大雨の洗礼を受けた佳木斯市は満天藍に染まり、秋の風情に満ちていた。市東部にある「佳木斯市烈士陵园」はこの日、特別の客人を迎えた。一行は肅々と緑の中を進み、緑川英子・劉仁の墓前に足を運んだ。そして黙祷、献花の後、陵墓を清め、追悼の言葉を捧げた。式典を終えた一行は白地に青の文字の横断幕を広げた。そこには鮮やかに「長谷川テル女史墓前に誓う旅」と書かれていた。この一行20人は日中友好協会大阪府連合会訪問団であり、山本恒人団長とともに墓前に「歴史を胸に刻み、日中不再戦、世代をつなぐ友好を」と誓いを立てた。



9月11日、日中友好協会大阪府連合会訪問団はハルピンに到着、短い訪問の後、2日目に第二の目的地佳木斯市に向かった。途中、方正県に立ち寄って開拓団犠牲者公墓のある「中日友好園林」を参観した。9月13日早朝、訪問団は「佳木斯市烈士陵园」に到着した。陵园の松林の奥には、V字型の純白の大理石をつなぐように金色の墓碑が差し渡されている。これこそ「国際主義戦士」の称号をもつ緑川英子女史と夫劉仁の墓である。この墓碑は、一行のうち老いた一人にとっては特別の意味あいをもっている。彼女こそ緑川英子と劉仁との間の忘れ形見、本年古稀を迎える長谷川暁子女史、中国名劉暁嵐という。



長谷川暁子は日本から持参した白い布を取り出し、墓碑の表裏を丁寧に拭いて、黙々と父母への愛惜を捧げた。同時に、緑川英子という勇敢で傑出した日本女性の生涯を良く知る訪問団のメンバーも、墓碑にある緑川英子の反戦事績を通訳が翻訳し始めると、熱心に耳を傾けた。「緑川英子、本名長谷川テル。日本プロレタリア・エスペランチスト連盟会員。1936年、中国から日本に留学中の学生劉仁と結婚。1937年、日本による中国侵略戦争全面化前夜に上海に赴き、開戦とともに反戦宣伝活動に従事。彼女は、反戦のために執筆し、反戦デモに参加し、抗日戦争開始後は中国中央政府による日本語ラジオ放送対日宣伝を担当した。1945年11月、抗戦勝利後の東北に來り、東北教育委員会委員および東北社会調査研究所所員を歴任するとともに、東北大学の招聘により授業も担当した。1947年1月、緑川英子は病により佳木斯市にて逝去、享年35歳」。日本の偉大な反戦女性緑川英子の生涯にあらためて感動しつつ、一行は墓前に佇み、追悼式典が始まった。団秘書長平松悦雄の司会のもと、山本恒人先生は次のような追悼の辞を捧げた。「私たちは、日本軍国主義が敗北した記念すべき70周年にあたって、安倍首相による誤った歴史認識に満ちた『談話』に左右されず、侵略戦争における加害者としての国民的反省にもとづき、再び戦争へと向かう危険な道を決して許しません。私たちは、平和憲法を守りぬぎ、両国民衆の友好の絆をますます強めていくという真の『未来志向』を、お二人の墓前に誓います。緑川英子女史・劉仁先生、あなたがたの国際反戦の精神溢れる行動は日本国民の誇りであり、私たちはこれからもあなた方に学び、生きて参ります」。



長谷川暁子女史は父母の墓碑を清めた後、高ぶる心情を抑えながら、次のように語った。「私は父母の墓地の所在をつきとめて以来、また佳木斯市政府のご配慮によってこの墓地が烈士陵园に移されて以来、すでに十数回佳木斯に参り、ここに埋葬された両親を見守ってきました。今、墓碑を清めていた時、母テルは私に話しかけてくれたように思います。《私はいまとても安楽な気持ちよ。あなたも家族も安心して頂戴。あなたは中国と日本、両国人民の娘なのよ。あなたがたが私と父さんの遺志を受け継いで、日本の国民と若い世代に対して、平和は人類共同の願いであり、不再戦が世界の趨勢であることを伝えてくれよう願っているわ》」と。長谷川女史は続いて「佳木斯市政府が緑川英子墓地の建設、移設と改修、維持管理のためにきめ細かいご配慮を下さっておりますことに心から感謝いたします。父母の霊は今日の式典に感激するとともに慰められております」と語った。追悼式典の後、一行の平井恭子さんは手作りの花飾りを恭しく墓前に捧げた。続いて訪問団全員が広げた白地の横断幕には鮮烈な一行が綴られていた。《安倍「戦争法案」廃案、日本平和憲法を守りぬく》。



佳木斯市烈士陵园における追悼と墓前での誓いの後、日中友好協会大阪府連合会訪問団一行は市政府に招かれ、陳代文副市長が応対、歓迎の言葉を述べた。「歴史を忘れないというのは、過去の恨みを忘れないということではなく、侵略は必ずや敗北し、正義は必ずや勝利するという客観的な

法則をさらに深く認識するためなのです。緑川英子女史はその傑出した象徴であって、彼女の事績はたとえ日本軍国主義者が卑劣な侵略戦争を始めたときにも、日本人民の間には正義と平和への声が存在したのです」。佳木斯市政府の心のこもった接待を受け、感無量の一行のひとり小川碧女史は手作りの絵や折り紙の人形など反戦の宣伝物を陳代文副市長に手渡したが、それは訪問団一行の陵園訪問・墓前式典が滞りなく成功したことへの感謝の気持ちを代表するものであった。一座には拍手が響き渡った。当日、訪問団は佳木斯市を離れ、牡丹江に向かい参観、長春訪問の後帰国の途につく。